

親鸞と自然

——「自然法爾」法語を中心として——

小池 秀章

(京都女子学園)

一 はじめに

日本において、「自然環境」「自然科学」等の「自然(しぜん)」の用法が定着したのは、ほぼ明治三〇年代のことであると言われている。⁽¹⁾よって、親鸞が、そのような意味で「自然(しぜん)」という語を使用しているはずはなく、事実、使用していない。また、もともと「自然(しぜん・じねん)」は、多くの場合、「自然に」のように副詞的に用い、「おのずからそうあること(おのずからしかり)」という意味を持つものであった。しかし、親鸞は、「自然法爾」法語で、「自然(じねん)」について解釈する中、「自然(じねん)」とは、「おのずからしかり」ではなく、「おのずからしむ」と読まれているのである。

以下、「自然法爾」法語を中心として、親鸞の「自然」について、考察していく。そして更に、それが、現代社会の「自然破壊の問題」や「環境問題」に対して何らかの提言をする根拠と成り得るのかということも考えてみたい。

二 「自然法爾」法語について

一般的に、「自然法爾章」と呼ばれている法語には、もともと標題はついていなかった。真宗高田派では、「獲得名号自然法爾御書」と呼んでいるが、著者と言ってよいであろう顕智は、どこにもこの標題を書いていない。『末灯鈔』に、「自然法爾事」という標題があるが、これをつけたのは編者の從覚（一二九五―一三六〇）（覚如の次男）ではなく、かなり後の写本に出てくるものであって、蓮如も用いていない。

「獲得名号自然法爾御書」の後書きに、

正嘉二歳戊午十二月 善法坊僧都御坊三条とみのこうちの御坊にて 聖人にあいまいらせてのききがき そのとき顕智これをかくなり。

とある事より、一二五八年、顕智（高田派第三世）（三三歳）が、親鸞（八六歳）から聞き書きされた法語であることは確かである。しかし、種々の異本もあり、主なものとして五種類ある。顕智真蹟本が三種類（卷子本・『見聞』・『聞書』⁽²⁾）と、文明本『三帖和讃』所収本と、『末灯鈔』所収本である。顕智真蹟本は、三本共ほぼ同一であり、原形であると考えられる。文明本『三帖和讃』所収本は、同系列ではあるが、若干の相違が見られる。『末灯鈔』所収本は、獲得名号の積がなく、文章も整理されており、別系列のものであると考えられる⁽³⁾。よって、以下の考察は、顕智真蹟卷子本（『獲得名号自然法爾御書』）による。

「獲得名号自然法爾御書」（顕智真蹟本三本共）では、「獲字は」「得字は」「名字は」「号字は」「自然といふは」は、行頭から書き始められているが、自然についての文字の解釈をする文章は、二行目から六文字下げて書き始められて

いる。そして、「弥陀仏の御ちかひのもとより」から再び、行頭から書き始められている。この形式から見ても分かるように、「獲得名号自然法爾御書」は、「自然法爾」という言葉について解釈されたものではなく、「獲・得・名・号・自然」という言葉について解釈されたものであり、「法爾」という言葉は、「自然」の説明において使われた言葉である（直接的には、「然」の説明において使われているが、「自」にすでに「しからしむ」という内容を含んでいる）。ちなみに、親鸞は、他の書物でも「自然法爾」という四字熟語は用いていない。

なお、「獲・得・名・号」については、「獲得」と「名号」なのか、「獲得名号（名号を獲得する）」なのか、更に言えば、「自然」との関係はどう考えるべきか、疑問の残るところであるが、後に考察する。

以下、文章にしたがって全体を見ていく中で、「自然」とは、何を意味する言葉であるかということと、「獲得名号」と「自然」の関係を明らかにする。

三 「獲・得・名・号」の文字の解釈の一段

獲字は、因位するとき、うるを獲といふ。

得字は、果位のとくにいたりてうることを得といふなり。

名字は、因位のときのなを名といふ。

号字は、果位のときのなを号といふ。

とあるように、「獲得」と「名号」をそれぞれ因果に配当している。

「獲」の字については、『尊号真像銘文（広本・正嘉本）』（正嘉二年（一二五八）六月二八日（八六歳））に、

「獲」といふはうるといふことばなり、うるといふはすなわち因位のときさとりをうるといふ、」（『勢至獲念仏円通』の獲の解釈）（『真聖全』II五八一頁）

と、「獲」を因位で使っている。

「得」の字については、『尊号真像銘文』に、「必得超絶去 往生安楽国」の得を解釈して、

「得はえたりといふ」（『真聖全』II五七九頁）

と言い、『唯信鈔文意』（正嘉元歳（一二五七）八月一九日（八五歳）（初本は建長二年（一二五〇）一〇月一日（七八歳））に、「必得往生」の得を解釈して、

「得はうるといふ、うるといふは往生をうるとなり。」（『真聖全』II六三四頁）

と、「得」を果位で使っている。

また、「正信偈」では、

「帰入功德大宝海 必獲入大会衆数 得至蓮華藏世界 即証真如法性身」（『真聖全』II四五頁）

とあるが、これは、「獲」を因位、「得」を果位に区別して使っていると言えよう。

しかし、『教行信証』に、

「信染を獲得する」（『信卷』『真聖全』II四七頁）

という使い方も見られる。

よって、「獲得」を因果に配当する使い分けは、その傾向は見られるが、必ずしも厳密なものではないと言えよう。

「名号」の字については、『唯信鈔文意』に

「尊号」といふは南無阿弥陀仏なり。尊はたふとくすぐれたりとなり、号は仏になりたまふてのちのみなをまうす、名はいまだ仏になりたまはぬときのみなをまうすなり。この如來の尊号は不可稱不可説不可思議にましますゆへに、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひのみななり。この仏のみなはよろづの如來の名号にすぐれたまへり。これすなはち誓願なるがゆへなり。」（『真聖全』 Ⅱ六二一頁）

とあるように、因果に配当する使い分けが見られる。そして、弥陀の名号が多く如來の名号によりすぐれているのは、誓願があるからだと言う。

では、「獲得」と「名号」をそれぞれ因果に配当することによって、何を表そうとされているのであろうか。この法語の中では、それ以上のことは述べられていないが、次のように理解したい。

「獲得」を因果に配当されているのは、信心を獲得することも、往生成仏を得ることも、本願力回向によるということ、つまり、自然（おのずからしからしむ）であるということを表す為であらう。また、信心を獲得した時、仏果の因が円満する（本願力回向の信である）故に、臨終の一念において、浄土に往生し即成仏する（仏果を得る）ということが、自然であるということを表す為でもあらう。

「名号」を因果に配当されているのは、名号が単なる言葉ではなく、弥陀成仏の因果（五劫思惟の願を建て、兆載永劫の修行によって（因）、南無阿弥陀仏の名号が成就された（果））を内実として持っている言葉であることを示し、本願の通り衆生を救済する働きを持つ言葉であることを表す為であらう。名号は本願の顕現体であるがゆえに、一切の衆生を救う働きを持ち、それを自然（おのずからしからしむ）という語で表していられるのである。

四 「自然」の文字の解釈の一段

「自然」という言葉は、梵語の訳語ではなく、もともと、中国の老莊思想を表す重要な用語であり、それが『無量寿経』を翻訳するときに、多く使われている。親鸞の特徴は、本来、「おのずからしかり」と読むべき言葉を、「おのずからしかりしむ」と読んだ所にある。「おのずからしかり」と読んだ場合は、「そのものの持っている性質通りにそなうっている」という意味になるが、「おのずからしかりしむ」と読んだ場合は、「他のもの（親鸞においては阿弥陀仏）によって、そうあらしめられる」という意味になる。

「獲得名号自然法爾御書」では、「自然」を解釈して。

自然といふは、自は、おのづからといふ、行者のはからいにあらず。しからしむといふことばなり。然といふは、しからしむといふことば、行者のはからいにあらず、如来のちかひにてあるがゆへに。

とある。これによると、自然というのは、「おのずからしかりしむ」ということである。それは、行者のはからいではなく、如来の誓いであるからである。と、「自然（おのずからしかりしむ）」の根拠に、本願をあげている。

『唯信鈔文意』には、

「また「自」はをのづからといふ、をのづからといふは自然といふ、自然といふはしからしむといふ、しからしむといふは、行者のはじめてともかくもはからはざるに、過去・今生・未来の一切のつみを善に転じかへなすといふなり。転ずといふは、つみをけしうしなはずして善になすなり、よろづのみづ大海にいればすなはちうしほとなるがごとし。弥陀の願力を信ずるがゆへに、如来の功德をえしむるがゆへに、しからしむといふ。はじめて

功德をえんとはからはざれば自然といふなり。」(『真聖全』 Ⅱ六二三頁)

と、自然というのは、「おのずからしからしむ」ということであり、それは、行者のはからいを超えて、一切の罪を善に転じるといふ転悪成善の益が与えられるということであるといい、その根拠に、「弥陀の願力を信するがゆへに」と、本願を受け入れることをあげている。

『尊号真像銘文』には、「其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転」の自を解釈して、

「聞名欲往生」といふは「聞」といふは如来のちかひの御なを信ずとまふす也、(中略) 自はおのづからといふ、おのづからといふは衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらいにいたらしむとなり、自然といふことば也。」(『真聖全』 Ⅱ五七八頁)

と、ある。衆生のはからいではなく、弥陀のはからいによって、不退転の位に到らせていただくので、自然(おのずから)と言うのであるが、その前提として、誓いの御名(名号)を信ず(本願を受け入れる)ということがある。

『高僧和讃』には、

「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり

自然はすなはち報土なり 証大涅槃うたがはず」(『真聖全』 Ⅱ五一〇頁)

とある。信は願より生じることとは、衆生が起す信ではなく、本願力回向の信であるということである。つまり、本願を信じさせ念仏させるのも、本願の働きであり、その本願のおのずからなる働きによって、衆生を成仏させるのである。

また、「自然(おのずからしからしむ)」ということとは、親鸞においては、「必然」ということを意味する。それは、

衆生のはからいではなく、弥陀のはからいであるからである。

『尊号真像銘文』に

「必得超絶去往生安楽国」といふは、必はかならずといふ、かならずといふはさだまりぬといふころ也、また自然といふころ也。」（『真聖全』II五七九頁）

とあり、「行巻」「六字釈」に、

「必の言は、審也（ツマビラカナリ）然也（シカラシムトナリ）分極也（アキラカナリ・ワカチキワムル）」（『真聖全』II二二頁）

とあるのがそれである。

以上、「自然」とは、「おのずからしからしむ」ということであり、その根底に、弥陀の本願があることが明らかとなった。そのことを、次に「法爾」という語によって、明確に表すのである。

法爾といふは、この如来のおむちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふ。法爾は、このおんちかひなりけるゆへに、すべて行者のはからひのなきをもて、この法のとくのゆへにしからしむといふなり、すべて人のはじめてはからはざるなり。このゆへに他力には義なきを義とすとすべしとなり。自然といふは、もとよりしからしむといふことばなり。

とあるように、何のおのずからなる働きであるのかを明確にする為に、「法爾」という言葉を使っている。「法爾（法としてしからしむ）」つまり、「本願の法として、そうあらしめる」ということである。

親鸞は、「法爾」とよく似た意味で、「法則」という言葉を使っている。『一念多念文意』（八五歳）に、

「則といふは、すなわちといふ、のりとまふすことばなり、如来の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに広大の利益をうるなり、自然にさまざまのさとりをすなわちひらく法則なり。法則といふは、はじめて行者のはからひにあらず、もとより不可思議の利益にあづかること、自然のありさまとまふすことを法則とはまふすなり。一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらわすを法則とはまふすなり。」(『真聖全』Ⅱ六一一頁)

と、本願の持つている法則性を「法則」という言葉で表している。

また、この「法爾」という言葉は、法然によつたものと考えられる。『和語灯録』に、

「法爾道理といふ事あり。ほのをはそらにのぼり、みづはくだりさまにながる。菓子の中のすき物あり、あまき物あり、これらはみな法爾道理也。阿弥陀ほとけの本願は、名号をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば、ただ一向に念仏だにも申せば、仏の来迎は、法爾道理にてそなはるべきなり。」(『真聖全』Ⅳ六八三頁)

と、あるように、法然は、それぞれのものには、そのものが本来持つている性質があり、その性質通りに物事が成つていくということを「法爾道理」と言われている。法然の「法爾」は「法としてしかり」であるが、親鸞は、「法としてしからしむ」と読むことによつて、本願力回向の義を打ち出していったところに、特徴があると言えよう。

以上、本願のおのずからなる働きであるから、「自然(おのずからしからしむ)」といい、「法爾(法としてしからしむ)」と言う。それは、同時に、行者のはからいで成立するような事柄では無いということを表すことになる。よつて、「他力には義なきを義とす(行者のはからいを加えないことを本義とする)」としるべしとなり」と言われるのである。

五 自然の法義の解釈の一段

弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらざして、南無阿弥陀とたのませたまひて、むかへむとはかはせたまひたるによりて、行者のよからむともあしからむともおもはぬを、自然とはまふすぞとききて候。

とある。これによると、阿弥陀仏の誓願が、行者のはからいではなく、南無阿弥陀と（本願力を）たのませて、浄土に迎えとろうとおはからい下さったのであるから、行者が、これで善いだろうとか、これでは悪いだろうとか思いはからわないうことを自然というのだと聞いている、⁽⁴⁾と云う。つまり、本願による救済は、行者のはからいを超えた本願そのものの働きによるものであるので、自然と言われるのである（本願を信じることも、念仏することも弥陀のはからい）。続いて、

ちかひのやうは、無上仏にならしめむとちかひたまへるなり。無上仏とまふすは、かたちもなくまします。かたちのみましますゆへに、自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには、無上涅槃とはまふさず。かたちもましますまぬやうをしらせむとて、はじめて弥陀仏とぞききならひて候。みだ仏は自然のやうをしらせむれうなり。

とある。誓い（本願）の内容は、無上仏に成らせようと誓っておられると云う。本願文では、「欲生我国」「若生者」と浄土往生を誓っているが、ここに、親鸞独自の往生即成仏の義が伺える。

そして、無上仏・無上涅槃は、かたちがない故に「自然」といい、そのかたちのない様を知らせようとして、阿弥陀仏と名告り出られた。阿弥陀仏は、「自然」のありさまを知らせるためのものであると云う。一般的には、自然を

「願力自然」と「無為自然」に分けて解釈し、この「自然」は「無為自然（おのずからしかり）」を表すとされるが、「自然（おのずからしからしむ）」の体を明らかにするものと見たい。⁽⁵⁾この「自然」といわれる無上仏・無上涅槃は、静的なものではなく、常に、垂名示形して衆生を救済しているような「おのずからしからしむ」という働きの本質なのである。

また、「阿弥陀仏は、「自然」のありさまを知らせるためのものである」といっても、阿弥陀仏が、真実真如を知らせる為に、仮に設けられた手段という意味ではなく、阿弥陀仏は、あくまで、真実真如の衆生救済の働きそのものである。それを表したのが、二種法身説である。『唯信鈔文意』に、

「しかれば仏について二種の法身まします、ひとつには法性法身とまうす、ふたつには方便法身とまうす。法性法身とまうすは、いろもなし、かたちもまします。しかればこころもおよばず、ことばもたえたり。この一如りかたちをあらはして方便法身とまうす、その御すがたに法蔵比丘となりたまひて不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり。」（『真聖全』Ⅱ六三〇頁）

とあるのがそれである。

そして、最後に、

この道理をこころえつるのちには、この自然のことは、つねにきたすべきにはあらざるなり。つねに自然をきたせば、義なきを義とすといふことは、なほ義のあるになるべし。これは仏智の不思議にてあるなり。

と、この道理を心得たのちには、この自然のことは、あれこれと論議すべきではない。そうでなければ、「義なきを義とす（はからいをまじえないことが、本義である）」ということさえ、はからいに陥ってしまう。これは、仏智の不思議

議であるからである。と、衆生の認識の範囲（分別の領域）で、あれこれ詮索することを戒めて終わっている。

六 「獲得名号」と「自然（法爾）」

ここで、一つの疑問が残った。それは、「獲得名号」と「自然（法爾）」の関係である。「獲得名号」の解釈が、あまりに簡略な為、はっきりしない。

まず、「獲・得・名・号」は、「獲得」と「名号」なのか、「獲得名号（名号を獲得する）」なのか。「獲得名号」という表現は、他の著作では見られない。「信樂を獲得する」というように、獲得の対象は常に信であるので、これを、四字熟語として見なしてよいか疑問がないわけではないが、「名号を獲得する」と表現したところに、深意があるとも理解できる。梯實圓氏は、単に、「獲・得・名・号・自然」について尋ねられたものに対する答えであり、それらは、連続した熟語ではないと見られている。⁽⁶⁾しかし、連続した熟語でないとしても、多くの諸先輩方が指摘されているように、「獲得名号」と「自然法爾」が無関係であるとは考えにくい。「獲得名号」を前提として、「自然法爾」が語られているという説。「自然法爾」は、名号のはたらしきを説明したものであり、名号論の一種であるという説。どれも頷ける説であるが、『末灯鈔』所収本で、「獲得名号」の釈が省略されているのは、どう考えればよいのであろうか。『末灯鈔』所収本が、常隨の弟子であった蓮位房が整理改訂を行い、親鸞の承認を得たものであるとすれば、「獲得名号」の釈は、省略可能であったと言わねばならない。⁽⁸⁾

そこで、名号ではなく本願に注目したい。「獲得」「名号」を因果に配当し、「獲得」も「名号」も本願力回向をその根底にして成立するものであることを表し、それを「自然（おのずからしからむ）」という語で説明していると見

るのである。そうすると、「自然」を「法爾（本願の法としてしからしむ）」という語で解釈していることから、本願力回向の義が明確にされる為、「獲得名号」の釈を省略しても、「自然」という語によって本願力回向の教義を開顯する法語として、成立しうるようになったと考えられないだろうか。

七 おわりに

以上、親鸞は、「自然」と「法爾」とを同じ意味で用い、本願の働きそのものを「自然」と言っていることが明らかになった。『教行信証』において、本願力回向として表した教義体系を「自然（おのずからしからしむ）」という語で表現しているのである。

また、それを衆生の側で語れば、「はからい」の否定であり、「無義為義」ということなのである。最後に、自然法爾の生き方はどのような生き方を考えてみたい。

「自然（おのずからしからしむ）」は、本願力回向の教義の一表現であり、それは、本願を信じる場（信心の場）においてのみ成立する内容である。決して単なる存在の原理ではない。信心を抜きに、「自然」を語ると、それは、親鸞のいう「自然」とは、異質なものになる。自然法爾の生き方は、「あるがままに生きる（物理的自然の法則に従って生きる）」ということではなく、真実真如との関係の中で語られるものなのである。しかし、それは、「真実真如に従って生きる」ということでもなく、「本願の法によって生かされていく（真実真如に生かされていく）」ということなのである。⁽⁹⁾

このことは、親鸞が自己をどのように捉えていたかに大きくかわる問題である。すなわち、親鸞は、自己を真実

真如を体得できるような人間ではなく、臨終の一念にいたるまで煩惱から離れられない凡夫であり、真実真如に背反する生き方をする存在であると捉えていたのである。そして、そのような真如背反の凡夫を救わんとする真如の働きが、方便法身の阿弥陀仏であり、本願力である。親鸞にとって、真如の人格的顕現である方便法身は、十方衆生の救済、突き詰めれば、煩惱具足の凡夫・悪人の救済を誓う本願をいのちとする阿弥陀仏でなければならぬのである。

その本願に生かされる生き方、すなわち、自然法爾の生き方とは、具体的には、二種深信的生活となって現れると言えよう。本願力回向の信の相状は、二種深信（機の深信・法の深信）として表現できる。機の深信とは、どこまでも真実真如に背反する生き方しかできない自己であると、機の真実を信じることであり、法の深信とは、本願はそのような機を必ず救う法であると、法の真実を信じることである。そこに生まれる生き方とは、常に現実の自己の真如背反のあり方を見つめつつ、本願の大悲に支えられ、育てられていく生き方である。それは、常に現実の自己のあり方を「悲しみ」として受け止めながら、他と係り合っていく生き方であって、その点で、老荘の無為自然の生き方とは相違する。老荘の無為自然の生き方と、人間のはからいを離れるというところでは共通点が見られるが、老荘の自然からは、大悲が出てこないゆえに、隱遁的生活に陥ってしまう傾向がある。それに対して、親鸞は、大悲の智慧のはたらきとして自然を見ていくのであって、衆生は、大悲の智慧に育てられていくという生き方が恵まれるのである。⁽¹⁰⁾

どんなに、「自然環境保護の為に、自然との共存・共生を」といっても、その自然を破壊せずには生きられない人間の現実がある。⁽¹¹⁾現代の文明社会を捨て、原始時代のような生活に戻ることも不可能である。現実を直視し、大悲の智慧に育てられながら現実と関わっていく自然法爾の人生観。ここに、現代社会の「自然破壊の問題」や「環境問

題」に対して、凡夫のなしえる行動・生き方が見えてくるのではないであろうか。

註

- (1) 相良亨『日本人の心』第八章「おのずから」二二二頁
- (2) 『聞書』は、すべて顕智真蹟であり、『見聞』を整理したものである。『見聞』は、余人の筆跡も混じるが、「自然法爾」法語の部分は顕智真蹟である。卷子本と、『見聞』は、どちらが先かは不明であるが、これらが、原形であると考えられる。
- (3) 梯實圓氏「いわゆる「自然法爾」法語について―「獲得名号自然法爾御書」の考察(その一)―」(『歴史と仏教の論集』)に詳しい。
- (4) 『末灯鈔』(『真聖全』Ⅱ六五九頁)にも「しかれば、わがみのわるければいかでか如来むかへたまはむとおもふべからず、凡夫はもとより煩惱具足したるゆへにわるきものとおもふべし。またわがこころのよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからいにては真実の報土へむまるべからざるなり。」とある。
- (5) 梯實圓氏「自然の法義について―「獲得名号自然法爾御書」の考察(その三)―」三・四頁(『行信学報』第一四号)
- (6) 梯實圓氏「親鸞聖人の自然観―いわゆる自然法爾法語をめぐる―」一五頁(『平成二二年度布教講会講義録』)
- (7) 石田充之氏『親鸞教学の基礎的研究(二)』十三 親鸞聖人の大乘仏教的救済観 五二六・五二七頁
同「十五 親鸞における超越的なるものについて」五六―頁
林智康氏「親鸞と法語『自然法爾』」七八三頁『印度学仏教研究』三二―二
小妻道生氏「『獲得名号自然法爾』についての一考察」三三頁『高田学報』第八五輯
寺川俊昭氏「親鸞における自然法爾の思想」二二―頁『宗教研究』五九卷
- (8) 梯實圓氏「いわゆる「自然法爾」法語について―「獲得名号自然法爾御書」の考察(その一)―」五三頁(『歴史と仏教の論集』)
- (9) 石田充之氏『親鸞教学の基礎的研究(三)』四 親鸞聖人における浄土教的基礎理念 二六六頁「大乘仏教的な、因

縁生・縁起・空無我の真実・真理に、生きていくという点から、かような大乘仏教的な真理・真実・真存在に生かされていくという点に大転換をおこなわれるわけです。（中略）大乘仏教的真実に生きる宗教から、大乘仏教的真理真実に生かされる宗教へ、能動的から受動的へと大転換されたところに親鸞聖人の生き方がみられてきます。」

(10) 梯實圓氏「親鸞聖人の自然観―いわゆる自然法爾法語をめぐって―」一六頁（『平成二二年度布教講座講義録』）

(11) 石田充之氏『親鸞教学の基礎的研究（三）』「六 親鸞聖人の人生観」二九六参照